The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	元遺山の史詩
Author(s)	鈴木, 虎雄
Citation	懐徳. 1955, 26, p. 36-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90285
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

元遺山の史詩

鈴木虎雄

遺山の事蹟は後として、先づ史詩といふ用語について申述べます。

〔史詩の意義〕

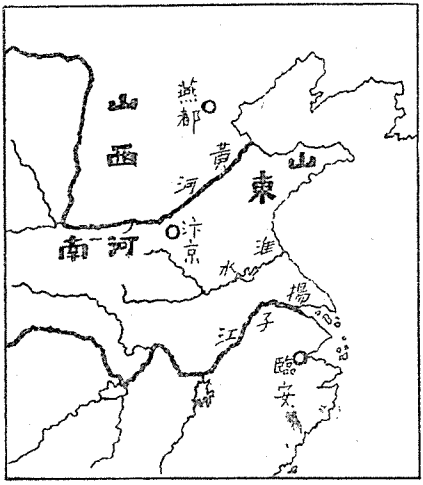
この用語は「歴史の事實に關する詩」の意味であります。即ち「歴史的事實に關係があると共に、それに作者の主觀が加味されてをる者」、さやうな詩をさして此く申したのである。事實ばかりを客觀的に叙べて、作者の主觀の加はらない者は、純粋の叙事詩であつて、此處でいふ史詩ではない。支那文學史に於ては純粋の叙事詩に對しては別に名がある。それは樂府體の詩、即ち樂府である。樂府とは音樂を掌る政府の役所である、古代には叙事詩を作つて、それを音樂に合はせて歌はせたことがある、さやうな面白い物語りを取り入れて音樂に合はせ、耳で聞いてわかる詩を樂府と稱した。音樂の役所を樂府といひ、上述の如き詩をも亦樂府といふのでは、それでは役所なのか、詩なのか混雜するに由て、同じ樂府でも音樂の方は樂府、詩の方は樂府、と申して之を區別してをる。樂府で作り用ゐられた樣な詩を「樂府體の詩」といふのである。尙、附加へて申しますが、唐の杜甫の詩は「詩史」であるといふ、これは「詩の沿革をのべた歴史」のことではなく、「詩を以て書いた歴史」だといふ意味である。杜詩は一千數百首あるが、それは即ち歴史に相當するといふので之を「詩史」だといふ。しかし杜甫自身は、自己を主とせず、他人即ち第三者を主として敍べた詩は樂府體の詩の形を用ゐてゐる。自らは之を樂府と稱してはゐないが形式は樂府である。白樂天の如きは自作のかかる詩を「新樂府」と明言してゐる。尙一つまぎらはしい者がある。それは「詠史」である。これ

は過去の史實を後代の人がよむのである。何でも過去の人なり事實なりに就いて後人が所感をのべるのである。これにも亦(一)純粹に過去の事を言ふに止まるものと、(二)表面は過去の事であるが、現代に過去と似た事があるとすると、現代の事を露骨に言ふのは憚がある所から、過去を假り者としてのべるもの、と此の二種がある。

そこで前にもどりますが、遺山の史詩は、「詠史」でなく、「樂府」でなく、杜詩の樂府體を除いた詩史の一部分の樣なものであります。此種の作が遺山の集に多く有るならば、遺山の集も亦「詩史」と呼ばれてよいかも知れませぬ。

〔遺山の生涯の大略〕

遺山は大體金朝の人である。金の前には遼がある。遼・金は異種族で契丹人である。奚だの契丹だのは唐以前から遼東方面に住んでゐたもので、段段と勢力が出來て、遼は今の北京から南にまで廣がり、その後へまた金が遼に代つて廣がつてきた。その後種種の沿革はあるが、大體に於て金と宋とは淮水を隔てて南北をなしてゐた。卽ち淮水以北が金、以南が宋、の領域といふわけであつた。



遺山は名は好問、字は裕之、遺山はその號、太原秀容（山西省）の人。遠祖は拓跋魏（北魏、後魏、元魏、）に出で、元を氏とす。唐代の系統に元結がある。父は德明、母は王氏、遺山は生後七月で德明の弟格の家を嗣ぐ、格の妻は張氏である。遺山の前妻は張氏、後妻は毛氏、男子三人、女子五人あり、長男・長女・次女・第三女は張氏の出、次男・三男・第四女・五女は毛氏の出である。遺山は金の章宗の明昌元年（南宋光宗紹熙元年 西紀一一九〇）に生れ、元の憲宗の七年（南宋理宗淳祐十二年、西紀一二五七）に卒した、享年六十八。

遺山は四歳にして書を讀み、七歳小學に入り、八歳にして作詩を學ぶ、蓋し生父德明と兄敏之とよりて學んだものである。十四歳のとき養父格が陵川（山西の縣）の令となつたので之に從ひゆき、因て其地の郝經に從て學ぶ。此に注意すべきは郝經が二人あることである。

郝經（天挺、伯常、繼先）——思溫（和之）——經（晉卿）

遺山が師事したのは郝經晉卿であり、晉卿の孫にあたる郝經繼先伯常は遺山の門人である。晉卿は偉い人であつて、當時多くの青年は皆試驗勉强をしてをるのに、晉卿は遺山に對して、眞の學問をして人物を造りあげ、眞の詩文を能くせしめることを目的として教育を施した。左の如き逸話がある。或る人が晉卿に向て「この青年は今受驗しようとしてゐるのにあなたは作詩などさせてゐるのは時間を空費させるのでないか」と言うと、晉卿は之に答へて、「あなたは教育の道を知らぬ、わしが詩を作らせてをるのは彼を受驗青年とさせないためなのだ」といつたといふ。

遺山自身は、「人が獨立しうるためには、國家の教養・父兄の淵源・師友の講習の三つが備はることを要する」と言うてをる。清朝の趙翼は更に「遺山の人物ができあがつたについては地と時とが之を爲さしめた」と言うてをる。（甌北詩話）地といふのは遺山が支那大陸の北方に生長したことをさし、時といふのは遺山が金の亡國の際に生存してゐたことをさしたのである。

遺山はそれから益、生長して、三十二歳及び三十五歳の時、それぞれの國家試驗に及第し、地方及び中央の官吏となつた。彼の四十三歳の時、即ち金の哀宗の天興元年（宋理宗紹定五年、蒙古太宗四年、西紀一二三二）三月には金の都汴京（今の河南開封）は蒙古軍に圍まれ、十二月には哀宗は汴京から脫出して東の方宋州（河南歸德）へ赴くこととなつた。翌二年（蒙古太宗五年）の正月には汴京の西面元帥崔立といふ者が叛亂して、クーデターを行つて蒙古軍に內應し、四月には崔立は梁王從恪・荊王守純及び諸の宗室男女五百餘人を汴京の城東五里にある青城に送り、その大部分は虐殺され、翌日には太后・皇后兩人（宣宗后王氏、哀宗后徒單氏）は蒙古軍へ送られた。三教・（儒、道、佛）醫流・工匠・繡女等も亦蒙古軍に送られた。この時遺山は四十四

歳、尚書省掾であつたが、崔立の下で左右司員外郎に命ぜられた。三年正月には哀宗は縊れ死し、末帝完顏承麟は亂兵に殺され、此に金は滅亡した。六月に、この崔立は李伯淵といふ武人によつて刺し殺された。遺山は正大八年、四十二歳の時、繼母張氏及び妻張氏が歿した。後妻毛氏を娶つたのは何時か判明せぬが、その翌年頃ではあるまいか。この毛氏は蒙古の軍帥と連係のあつた人で、又萬戸官名張柔とも關係があつた。汴京が陷つてから遺山等は蒙古軍の捕虜となつて聊城山東省へつれてゆかれた。それから濟南・泰山等に遊び、五十歳の時蒙古太宗十一年には鄉里太原にあり、金史の編纂は此時に始まる。彼は順天北京にも往來した。金史の資料は萬戸張柔の家に在つた、これは遺山の指揮に由つたものだらうといふ。

遺山は晩年の四箇年は鎭州眞定府に往來してゐたが、六十六歳の十月から獲鹿縣鹿泉に居り、野史亭をも此處に築く計畫であつたが、翌年元憲宗七年西紀一二五七九月、鹿泉の寓居で病死し、秀容縣の紫舟山下に歸葬された。

遺山は崔立の亂の時に何故に死なかつたか、のみならず、立のために頌德碑の文まで起草したといふことは後世の學者から指彈を受ける點である。しかし立は當時まだ表面上金の天子を奉じてゐたので、遺山は金に仕へてをるつもりであつたらう。金亡びてからは彼は他の人人を蒙古（元）の朝廷へ推薦はしたが、自身は蒙古の官職を受けなかつた。又彼は金朝の歷史を後世にのこすことを大目的として、金源君臣言行錄・壬辰雜編・中州集等の書を編したのである。當時の事情を察すれば、備はるを一人に求めるのは酷であらう。

〔詩に對する意見〕

遺山の詩說は彼が二十八歳のとき作つた論詩絕句三十首、中州集の叙傳・詩評、其他に由つて窺はれる。要旨は㈠心術を正す、㈡雅正を尚ぶ、㈢眞を尚び淡を尚ぶ、㈣氣力を貴び靡弱を忌む、の四項で、此外に「自悟」と、「詩と禪味との近似」とを說いてゐる。此等の事は單にかかる抽象的な言辭のみにてはわかりにくく、事例を擧げて說明する必要があるのであるが、今一一之を說くことはむつかしいので、略〻其の意を推察せられんことを望むのである。

以下遺山の作品實例若干を揭げて、之を讀み且その大意を說く。

岐陽三首　第二首

〔題意〕　此題の詩は本集には三首ある、これはその第二首である。正大八年（西紀一二三一）正月の作かと考へる。第三首に三十六峰長劍在の句がある、三十六峰とは嵩山のそれであらうから、作者は此時に中央から召されて汴京に赴く途中で洛陽附近を通過したをりの作であらう。此時には蒙古の軍が侵入して鳳翔が攻め陷された。岐陽は鳳翔の屬縣で勿論陷されたのである。

百二關河草不レ横　百二の關河　草横はらず
十年戎馬暗秦京　十年　戎馬　秦京　暗し
岐陽西望無來信　岐陽　西に望めば來信なく
隴水東流聞哭聲　隴水　東に流れて哭聲を聞く
野蔓有レ情縈戰骨　野蔓　情あり戰骨を縈る
殘陽何意照空城　殘陽　何の意か　空城を照らす
從レ誰細向蒼蒼問　誰に　從て細に蒼蒼に向て問はむ
爭遣蚩尤作五兵　爭でか蚩尤をして五兵を作らしめしやと

〔字句解〕　○百二關河　百二とは百分の二、戰國の頃秦が据つた地は、古は雍州と呼ばれ、大體今の陝西省にあたる、其の地は地形の險に於ても軍備の數に於ても天下の百分の二を有すといはれ、百二山河といふ語がある、ここは山河を關河と改めて使用した。「百分の二の地の利を占めてゐる關や河のある處」の意である。○横　地面に横はり生えること、○十年　正大八年より過去の十年、大凡にていふ。○戎馬、兵馬。○秦京　秦の京であ

つた長安をさす、後世も長安といふ、今の陝西省の西安。○岐陽　題下にある。○來信　信は消息、たより、手紙。○隴水・哭聲　古歌に、隴頭流水　鳴聲幽咽　遙望秦川　肝腸斷絶　といふのがある、隴とは大體甘肅省の地方を指す、隴は大邱陵のことで、甘肅の地形が之に當る。昔、長安の方からこの隴を踰えて西の方へ征伐に往くとき、この邱陵から東へ流れる水の音を聞くと水の聲は咽んでゐる樣だ、そこで長安の方の川をながめると、人人の肝や腸もちぎれんばかりだ、といふのである。ここは作者が秦京の人たちの心を想像してのべた。從軍者のことを言ふのではない。○野蔓　野らに生えてゐるつるぐさ。○縈　めぐる、まとひつく。○殘陽　のこりの夕日。○空城　人の居ない城、岐陽のそれをさす。○蒼蒼　天の色で、青黑いいろ、依て天そのものをさした。○爭　俗用、いかでか。○遣　俗用、「をして……せしむる」。○蚩尤　上古炎帝の時の亂暴者で炎帝と戰つたといふ、蚩尤が五兵を作つたといふ話は無いが、かく言うた。○五兵　五種の兵器、五種の數へ方はいろいろで、「禮記」月令の注では弓矢・殳・矛・戈・戟、「周禮」の注では戈・殳・戟・酋矛・夷矛などとしてある。

〔義解〕　天下の地の利百分の二を占めてゐるといふ秦地の關所や河のある處では草も生えるに由なく、この十年ばかりといふもの兵馬の塵が秦の都（長安）を暗くしてをる。岐陽を西の方にながめても來る消息は無く、隴から流れる水は東にそそいで人人の哭する聲が聞えてくる。野らにはふつる草も心ありげに戰死者の骨をかかへる樣にまつはりつく、いかなるつもりか夕日の光が人の居ない城を照らしてゐる、（岐陽のあたりはこんなであらう）。わたしはだれについて仔細に蒼蒼たる天に向つてたづねようぞ、なんであなた（天）は蚩尤の如き亂暴者に五種類もの武器を作らせたのであるか、と。（さうさせたことが恨めしい）。

壬辰十二月、車駕東狩後卽事五首　第二首、第三首、

〔題意〕　壬辰とは、金の哀宗の天興元年（西紀一二三二）である。車駕東狩とは、この頃金は蒙古軍から都の汴京

（今の河南省開封）を攻め立てられ、哀宗は大臣白撒等の議に依りて東の方宋州（河南の歸德）へ逃れることになつた、狩するとは逃れるといふことを婉曲にいうた辭つかひである。卽事とはその時出遇うた事がらについてのべることである。天興元年の十二月に天子哀宗が都の東である宋州へお逃げになつてから、そのをりの事につけてのべた詩。

慘澹龍蛇日鬪爭
干戈直欲盡生靈
高原水出山河改
戰地風來草木腥
精衞有冤塡瀚海
包胥無淚哭秦庭
幷州豪傑知誰在
莫擬分軍下井陘

慘澹として　龍蛇　日々に鬪爭す
干戈　直に　生靈を盡くさんと欲す
高原　水出でて山河　改まり
戰地　風來て草木　腥し
精衞　冤あり　瀚海を塡む
包胥　淚の秦庭に哭するなし
幷州の豪傑　知　誰か在る
軍を分ち井陘より下らんと擬する莫らんや

〔字句解〕○慘澹　むごたらしくみじめなさま、○龍蛇　かみつきあふ動物、蒙古及び金の軍隊をさす、○干戈　たて、ほこ、○生靈　人民をいふ、○精衞　鳥の名、古傳說に、昔、炎帝に女の子があり、それが東海に溺れて死んだ、女子はそれを恨み、西山から木や石を嘴にくはへて運び東海を塡めてやると言うたといふ。○冤　無實の罪によるうらみ、○瀚海　ゴビの沙漠、傳說では東海とあるのを瀚海と變えて使用した、○包胥　申包胥といふ人のこと、包胥は楚國の臣で、楚が他國から攻められた時、秦の國に赴き援兵を乞ひ、七日七夜廷に哭し血の淚を流がしたといふ。○秦庭　秦の朝廷をいふ、本集の施國祁の注によると、精衞は金から蒙古へ嫁した衞紹公主（元の太祖の皇后となつた徒單鎰建）をたとへ、包胥は金の世宗の子璠をたとへたといふ、璠は哀宗が訛可と

いふ者を蒙古軍に遣はし和議を講ぜしめようとしたとき之に副使となるか、或は代理となつて往きたいと願ひ出た人、予は二句共に作者自己の心境をいうたもので他人の事をたとへていうたものでないと見る。○并州　今の山西省地方をさす、○豪傑　金の武將等をさす、○知　不レ知の意、下に誰の如き疑問詞がある時は知は不知の義となる、不が省略されたと同じ。○莫　豈莫、反語、○擬　用意する、待構へる、○分軍下井陘　漢の淮陰侯韓信の故事、井陘は易州の西、太行山脈の東にある險要の地名、韓信は趙を攻めるとき不意に此の險を下り趙の城に攻めかかり、趙の旗を拔き取つて漢の赤幟を立てた。

〔義解〕　我が金軍と蒙古軍とは龍蛇の如く慘澹とみじめな鬪爭を日日くりかへして、うち合ふ干戈は戰死者を多くして人民はすつかり無くなるかとおもはれる。高原から水が出てきて山も河も地形が改まり、戰場から風が吹くと草木も之がために血腥くおぼゆる。わたしの冤恨は昔話にある精衞の如く木や石で蒙古の沙漠を塡めてやりたい程であるが、如何にせん、むかし申包胥が援兵を乞ひに往つて秦庭に哭したときの様な涙の持ち合せをもたぬのである。并州の豪傑の武將たちの中にはどんな人が居るのか知らぬが、彼等の中には韓信の様に一軍を分けて井陘の險所から敵軍の方へ攻め下つてそれを打破るといふ用意をするものがまさかないわけでもあるまいに。

鬱鬱圍城度二兩年一　鬱鬱　圍城　兩年　度る
愁腸飢火日相煎　愁腸　飢火　日〻に相煎る
焦頭無二客知レ移レ突　焦頭　客の　突を移すを知るなし
曳足何人與共レ船　曳足　何人か與に船を共にする
白骨又多二兵死鬼一　白骨　又多し　兵死の鬼
青山元有二地行僊一　青山　元　地行の僊（仙）あり
西南三月音書絶　西南　三月　音書絶ゆ

落日孤雲望眼穿　落日（ラクジツ）　孤雲（コウウン）　望眼（ベウガン）　穿（うが）つ

〔字句解〕○焦頭　頭をこがす、火を救ふ時のさま、「戰國策」にある話で、或人が主人の「かまど」の口がまつすぐなのを見て口を曲げたらよいと忠告したが主人は從はなかつた。○移突　移は場所をうつす、突は「かまど」、○曳足　足をひきずること、後漢の馬援が故事、援は交阯を征伐にゆき、暑熱甚しく身體痛みつかれたが、それでも敵が攻め寄せるときには足をひきながら軍を觀た。○地行僊　地上をあるく仙人、仙人は雲に乘り天上に在るべきものだが、人間界に落ちて地上をゆく、施國祁注では白華傳を引いて、焦頭・曳足・地行僊、各自其の實際の人物を充ててをるが予は之に從はぬ。焦頭・曳足には充てた人物が有ると思はれるが、地行僊は自己を比したものと考へる。○西南　これは作者の家族の居た處の方位をさしたので、汴京から西南といふと南陽鄧州とおもはれる。○望眼穿　ながめやる眼に孔（あな）があく。

〔義解〕○敵軍に圍まれながら鬱鬱と思ひふさがりつつ二年をすごした。心配のある腸と、またその中にある飢ゑてたべもの欲しさの燃える念の火と、が毎日煎えてゐる。平生深い思慮を以て突（かまど）を安全の場所へ移すことを知り、いざ火災といふ時は頭を焦がしても之を救ふといふ樣な男（思慮ある政事家）は居らず、だれが昔の馬援の樣に足をひきずりながらも軍隊を觀るといふ程の男がゐて、天子が逃走される御船に一緒にお供をするものがあるのか。戰死して鬼となつた人人の白骨はまたまた多くなる、地上を行く仙人といふものも元來青山にはあるものだ、（自分はそんな仙人になりたい）。家族の居る西南の方（恐らく鄧州）からは三箇月も音書（たより）が絶えてをり、落ちかかる夕日に一片浮（ひとひら）ぶ雲をながめやり、みつめる眼には孔（あな）があくほどである。

俳體、雪香亭雜詠十五首第三、第十三、第十四、第十五、

〔題意〕俳體とか吳體とか言ふのは、詩體の正式を守らぬとか、詩の內容がまじめさを缺くとか、の場合にかく稱せられてゐる。この十五首必しも俳體と考へられぬが、詩意には多少過激に失するふしもあるかとおもふ、そ

れで作者は謙遜してわざとかく題したものかと考へる。汴京の宮城の正寢（常の御座所）を純和殿といふ、純和殿の西に雪香亭があつた。作者は天興二年（西紀一二三三）の春、まだ汴京の圍城中に在つて、ここに遊んで此等の詩を作つたのである。

落日青山一片愁
大河東注不還流
若爲長得熙春在
時上高層望宋州

落日　青山　一片愁ふ
大河　東に注ぎて　還り流れず
若爲　長に熙春の在ることを得ん
時に高層に上つて宋州を望む

〔字句解〕　青山　歸德の方向にあたつて見える山をいふ、○大河　黃河、○還流　河は東に流れる、かへり流れるとは西に逆流するをいふ、○若爲　俗用、いかにしてか、いかでか、○熙春　熙熙として光のどけき春の日、○宋州　卽ち歸德で、現に哀宗が脫走してをられる處。

〔義解〕　落ちかかる夕日に一片の青山が愁はしげに見える、黃河の水は東へ東へとそそぐばかりで立ちかへつては流れぬ。時時自分は高いところへ上つて天子の在す宋州の方をながめるが、どうしたならば、從前どほりいつまでもかがやくのどかな春日を存在させておくことができるのであらうか。

暖日晴雲錦樹新
風吹雨打旋成塵
宮園深閉無人到
自在流鶯哭暮春

暖日　晴雲　錦樹　新なり
風吹き雨打ちて旋　塵と成る
宮園深く閉ぢて　人の到るなし
自在に流鶯　暮春に哭す

〔字句解〕　○錦樹　秋の紅葉をさすこともある、ここは春であるから桃・杏（あんず）の類をさした。○旋　俗

用のとき旋・還ともに「また」の義に用ゐる。

〔義解〕晴れた太陽、暖かい雲の浮ぶところ、錦にまがふ花が木木に新しく咲く、それも風に吹かれ雨に打たれてはやがて塵となつてしまう。この宮殿のお庭も今は深く閉ざされてだれも來る人はなく、飛びうつる鶯が自在に暮れの春に哭いてゐる。

萬戸千門盡有名　萬戸千門盡く名あり
眼中歴歴經行を記す
賦家正有蕪城筆
一段傷心畫不成　賦家正に蕪城の筆あり
一段心を傷ましめ畫くも成らず

〔字句解〕○歴歴　一一、○記　記憶する、○經行　經過し行遊する、○賦家・蕪城　賦家は「賦」（美文の體の名）の作家、蕪城は荒れたる城、劉宋の時、鮑照といふ文學者があつて「蕪城賦」を作つた、照は臨海王子頊の部下で參軍といふ官となり子頊に隨て廣陵（今の楊州江都縣）に赴いた。子頊に叛逆の意あるを見て照は此賦を作つた、それは此處は漢の時、吳王濞が都した處で今は荒れてゐる、濞も謀叛して罪せられた人で、その行が子頊と似てゐる、因て賦に由て子頊を諷刺したのである。ここでは單に一時は榮えても亡びて荒れはてることのあるをいふ。固より金が亡びたことをいふ。○一段傷心畫不成　此は唐の高蟾の金陵晩眺の句である、其詩に曰く、曾伴浮雲歸晩色、猶陪落日泛秋聲、世間無限丹青手、一段傷心畫不成、と。遺山には屢〻古人の句をそのまま使用する癖がある。

〔義解〕この汴京の宮殿には萬の戸、千の門、みなそれぞれ何何宮、何何門、と名がついてゐて、わたしの眼には、それ等の一一が、あのをりどこをどう通つたといふことをはつきりとおぼえてゐる。（それに何といふ今の變り方だ）鮑照の樣な作賦家には（暗に自己を比す）蕪城の賦を作る筆はもつてゐるが、その荒れはてた容子を

一段と心を傷めて畫き出さうとしてもとてもあがくことはできぬ。

暮雲樓閣古今情　　暮雲　樓閣　今古の情
地老天荒恨未レ平　　地老い天荒る　恨未だ平ならず
白髮纍臣幾人在　　白髮の纍臣　幾人か在る
就レ中愁殺庾蘭成　　就中　愁殺す　庾蘭成(を)

〔字句解〕　○纍臣　縄でしばられてゐる臣、捕虜。○庾蘭成　梁代に庾信、字は蘭成といふ文學者があり、侯景の亂の時、北周に赴き、遂にそこで引留められて北周に仕へ高官となつた、しかし彼はいつも江南の梁の事が忘られず、「哀江南賦」を著はした、作者自己をそれに比した。

〔義解〕　夕暮の雲の浮ぶ宮殿樓閣をながめる情は古今のちがひはあるまい、（古人は悲しく寂しくながめたであらうがわたしもそのとほりだ）、いつも變らぬと考へてゐた地も老い、いつもかはらぬと考へてゐた天も荒れはて、わたしの恨みは平かにはならぬ。このたび白髮の老いたる身で捕はれの虜となつた臣は幾人あるか知らぬ（多からう）が、その中で極度に愁へさせられるものは庾蘭成（に比すべき自分）である。

癸巳四月二十九日、出京、

〔題意〕　癸巳は天興二年（西紀一二三三）である。前掲の雪香亭の詩はまだ春の花さかりの頃で、作者は汴京に居たのであるが、四月二十九日にはいよいよ汴京から出たのである。これから其河を渡り、山東省の聊城の方へつれてゆかれるのだ。

塞外初捐宴賜金　　塞外　初めて捐つ宴賜の金
當時南牧已駸駸　　當時(より)南牧　已に駸駸(たり)

只知灞上眞兒戲
誰謂神州遂陸沈
華表鶴來應有語
銅槃人去亦何心
興亡誰識天公意
留著青城閱古今

只知る灞上　眞に兒戲なるを
誰か謂はむ　神州遂に陸沈せんとは
華表　鶴來らば應に語あるなるべし
銅槃（盤）　人去る　亦何の心ぞ
興亡　誰か識らむ天公の意
青城を留著して古今を閲せしむ

〔字句解〕○塞外　長城のそと。○捐　棄てる、賜はつたのであるが効果が無いものに棄てる樣なものだといふ意味でかくいふ。○宴賜金　宴を張つて勞を慰めよとて天子から賜はる金錢、金朝では明昌二年（西紀一一九一）以後は、五年毎に一たび宴賜金を下された。○南牧　南に向けて馬を放牧する、實は侵略するをいふ。○駸駸　馬の速く進むさま。○灞上兒戲　漢の周勃が故事、勃は武將で灞水の上で細柳といふ處に陣を張つてゐた、天子が軍隊を閲したとき、細柳の營だけは觀るべきもので、其他は兒戲に類すると評した。○神州陸沈　神州・赤縣などといふは都の在る中原（黄河の流域）地方をさす、陸沈とは陸地のまま下に沈むこと、この各の語は舊くからあるが、四字連續して用ゐたのは晉の桓溫に始まる。○華表鶴來　華表とは桓表とも表木とも呼ばれ、神社の鳥居の冠の横木を取除けた如き形のもので、市街の繁華な場所を示すめじるしの木である。故事がある、昔、丁令威といふもの山東から遼東に往き、遼東から去つて千年の後鶴に乘つて還つてきた、少年が之を射ようとしたら、令威は歌をうたうた、其辭は、有レ鳥有レ鳥丁令威、去レ家千歳今來歸、城一郭如レ故人一民非、何不レ學レ仙冢纍纍、といふのだ。○銅槃人去　槃は盤と同じ、漢の武帝は長安の建章宮に高さ二十丈、大さ七圍りの銅柱を建て、その上に仙人の像を置き、仙人は盤を捧げて天から墜ちる甘露を承ける、この甘露に玉を碎いた屑をまぜ合はせて飲むと長生不老になれると考へた。魏の青龍年間に、この建物を打壞して銅盤の仙人を魏の都の方へ運び去らうと

した、そのとき仙人はさめざめと泣いたといふ、この運搬は不成功に了つた。唐の詩人李賀は此事について歌を作つてをる。○青城、汴京の城東五里にあつた城の名、金朝の初に、その將粘罕が兵を駐めて宋の徽宗・欽宗二帝の降服を受けた處である、その同じ場所で天興の末年には金の末帝は東へ逃れ、留守中に元帥崔立といふもの城を以て蒙古軍に降り、蒙古軍が亦この青城に陣取り、金の皇族や后妃たちは此處に集められ、その大部分は虐殺されたのである。遺山の門人郝經に「青陵行」といふ悲慘な詩がある。併せて此處に錄しておく。。

青陵行　　郝經

壞山壓城殺氣黑、一夜京城忽流血、弓刀合沓滿掖庭、妃主喧呼總狼藉、驅出宮門不敢哭、血淚滿面無人色、」戴樓門外是青城、匍匐赴死誰敢停、百年涵育儘塗地、死霧不散昏青冥、英府親賢端可憐、白首隨例亦就刑、」最苦愛王家兩族、二十餘年不曾出、朝朝點數到堂前、每向官司求米肉、男哥女妹自夫婦、覥面相看寃更酷、一旦開門見天日、推入行間便誅戮、」當時築城爲郊祀、卻與王家作東市、天興初年靖康末、國破家亡酷相似、君取他人既如此、今朝亦是尋常事、」君不見二百萬家族盡赤、八十里城皆瓦礫、白骨更比青城多、遺民獨向王孫泣、」禍本骨肉相殘賊、大臣蔽君尤難塞、至今行人不歎承天門、行人但嗟濠利宅、城荒國滅猶有二十仞牆、牆頭密匝生鐵棘、」

〔義解〕長城の外を守つてゐる軍隊に今からみればむだだとおもはれる慰勞の宴會資金を下賜されたことであつたが(明昌の初頃)、その頃からもはや蒙古軍は駸駸として南に向つて馬を進めてゐたのだ。灞水の上に陣取つてゐた我が金の軍隊はまことに兒戲にひとしいものであつたが、陸地ながら下に沈みこんでしまうとはだれが考へたであらう。華表に鶴が歸つて來たならば(丁令威の如く)何かものを言うことだらう(城郭如、故人民非といふ樣に)、銅盤の仙人が舊都から他處へやられてしまうのではどんな氣もちがするであらう。國を興してみたり亡ぼしてみたりする天の神樣の御心はどんなものか誰が知つてゐよう、あの青城といふ處、あんな處を留めてお

いて、或る時は金を興して宋を亡ぼし、或る時は金を亡ぼして蒙古（元）を興し、今昔を經過させてゐる、その氣もちはほんとうにわかりかねる。

癸巳五月三日、北渡三首

〔題意〕　癸巳は天興二年（西紀一二三三）で前に四月二十九日出京の詩があつた、四月二十九日に汴京から出て、五月三日には黄河を北へと渡つたのである。本集には此の「北渡」の前に「出都」と題する詩がある。其辭は、春闔斜一月曉聞レ鶯、信レ馬都一門半醉一醒、官一柳青一青莫レ回レ首、短一長亭是斷腸亭、といふのである。これは恐らく「出京」と同じ頃の作であらう。それからいよいよ河を渡つた。

道一旁僵一臥滿二纍囚一　　道旁　僵臥して纍囚滿つ
過去旃一車似二水流一　　過ぎ去る旃車　水の流るるに似たり
紅一粉哭隨二回一鶻馬一　　紅粉　哭して隨ふ回鶻の馬
爲レ誰一步一回一頭　　誰が爲めにか一步に一回頭するや

〔字句解〕　僵　たふれる、○旃車　旃は氈、毛織物、幕として懸けるもの、○紅粉　べに、おしろい、化粧をした女官其他をいふ、○回鶻　或は畏兀兒、種族の名、これは唐代に榮えた、借りて蒙古族をさす、

〔義解〕　道ばたに倒れ臥して繩につながれた捕虜がいつぱいゐる、そこを通つてゆく毛氈をかけた車は水の流るる樣にたえずつづいてゆく。お化粧をした婦女たちが哭きながら回鶻（蒙古人）の馬につきしたがふ、彼女等は一步すすんでは一たび頭をふりむけてゐるがだれのためあの樣にするのであらうか（恐らく別れに忍びない戀ひをる人があるのだらう）。

隨レ營木一佛賤二於柴一　　營に隨ふ木佛は柴よりも賤し

大樂編鐘滿市排　　大樂の編鐘は滿市に排す
虜掠幾何君莫問　　虜幾何を掠むと君問ふなかれ
大船渾載汴京來　　大船渾て汴京を載せ來る

〔字句解〕○營　蒙古の軍營、○木佛　木雕の佛像、○大樂　宮廷の大音樂、○編鐘　編成に用ゐる鐘、大音樂の時には鐘・磬其他多數の樂器を一定の器に懸けならべて用ゐる、○虜　蒙古をさす、○大船　蒙古の使用するそれ、○渾　すべて、○汴京　都の一切の物をいふ。○來　去といふに同じ。

〔義解〕蒙古軍の兵營にもつてゆかれる木雕りの佛像は柴よりも價が安く、大音樂のとき用ゐられる組合せの鐘などは市街一ぱいにならべられてゐる。（すこし後の話であるが、至元元年西紀一二六〇に元の都へ運ばれた鐘磬は千以上にのぼつたといふ）。蒙古軍がどれだけの品物を掠めたかなどあなたはお問ひになるな、品數など問題にならぬ。彼等は巨大な船で汴京の一切を載せていつたのである。

白骨縱横似亂麻　　白骨縱横亂麻に似たり
幾年桑梓變龍沙　　幾年か桑梓龍沙に變ず
只知河朔生靈盡　　只知る河朔生靈の盡くるを
破屋疎煙卻數家　　破屋疎煙卻て數家

〔字句解〕○桑梓　故鄕の地をさす。「詩經」の小弁の詩に、維桑與梓、必恭敬止、とあり、居宅には桑（クハ）だの梓（アヅサ）だのを植ゑる、子孫たるものは祖先がうゑたその木を見て恭しく之を敬ふといふのである。○龍沙　沙漠をいふ、沙漠には風に由て沙が吹きよせられ堤防の如きものができる、その形から之を龍堆などといふ、そこで沙漠をも廣く龍沙といふ。○河朔　河北、黃河以北。

〔義解〕　死人の白骨が縱にも横にも次第なく横はつてみだれた麻の樣だ、幾年もたたぬまに故鄕桑梓の地は沙漠に變つてしまつた。河北へ來たらそこは人民は無くなつてゐることだと知つてゐたのに、破れ家屋にほそぼそと幾筋かの煙が揚つて意外にもかへつて數軒の家がまだ見られる。

卽事

〔題意〕　此詩は天興三年　西紀一二三四　六月以後に崔立が殺されたことを聞いて作つたものとおもはれる。作地は判明せぬが、聊城あたりであるまいか。遺山の傳の處ですこしく觸れておいたが、哀宗が天興二年十二月に宋州　歸德　へ逃げてから後で、汴京の西面元帥であつた崔立は蒙古軍に內應して之に降り、金を裏切つたが、三年六月にこの崔立が李伯淵といふ武人に由て刺し殺された。此詩はその事についてのべたのである。

逆ー堅終當ニ鱠ー縷分ー　逆堅終に當に鱠縷（の如く）分つべし
揮レ刀今得レ快ニ三ー軍ー　刀を揮ひて今三軍を快にするを得
燃ー臍易レ盡嗟何及　燃臍盡き易き嗟何ぞ及ばむ
遺ー臭無ー窮古未レ聞　遺臭無窮古も未だ聞かず
京ー觀豈當レ誣ニ翟ー義ー　京觀豈に當に翟義を誣ゆべけん
衰衣自合レ從ニ高勳ー　衰（縗）衣自ら合に高勳に從ふべし
秋ー風一ー掬孤ー臣淚　秋風一掬孤臣の淚
叫ー斷蒼ー梧日ー暮雲　叫斷す蒼梧日暮の雲（に）

〔字句解〕　○逆堅　人の道を逆に行ふやつこ、崔立をさす、○鱠縷　肉を割いて鱠（なます）の縷（糸すじ）の如く分裂する、二字にて一つの概念だ、○三軍　昔は軍隊を上中下の三部に分ける、之を三軍といふ、つまり

全軍の意、○燃臍　「へそ」をもやす、後漢の董卓が故事、卓は靈帝の時長安の都に入り、家を焚き人を殺し暴虐を働いた、後に罪せられ屍を燒かれたが、その時彼の臍（へそ）の上に油を注いで燃したところ幾日ももえつづけたといふ、○遺臭　晉の桓溫の語に本く、溫は嘗て、「人は芳を百世に流す能はずば、臭を千載に遺すべし」と言うた。○京觀　大なる觀せ物、高さ六尺、六丈四方、上に高さ一丈六尺のめじるしの木を建てる。戰爭の時敵軍の遺骸などを聚めて作れるもの。○翟義　後漢の王莽が天下を取つたとき、義兵を擧げて之を討伐しようとした人。これは崔立が翟義にも比すべき義士を多く殺して京觀を建てた、それは無理だと言ひなしたものであらう。○衰衣　衰は緩、喪章、喪のあるとき衣にのけるもの、○高勳　人名、金の太宗の時の閤門使、時に張彥澤といふ者勳と仲あしく、勳が叔父及び弟を殺し、又多く暴虐を行ふ、帝怒て彥澤を刑に處し其の督を勳に命ず、勳、彥澤が腕を斷ちてのち之を刑に付しその心臟を割取りて死者を祭る、市民爭うて其の腦を破り髓を取り肉を小ま裂きにして之を食ふといふ。ここは崔立を憎む者も高勳が彥澤に對してやつた仕方に從て立が肉を喰つたことをいふ。○蒼梧　地名、湖南省の南部にある、昔、舜帝は死して蒼梧の野に葬られたといふ、ここは金の天子の亡くなつた地方を想像して比した。

〔義解〕　あの大逆無道の奴は結局その肉をずたずたにして鱠（なます）の縷（糸すじ）の樣に分割してしまうべきであつたが、（豫期の如く）今は刀を揮うて之を斬りすて、全軍の心もちを愉快にさせることができた。あの奴の罪惡をおもへば、董卓の樣に臍を燃してやつていついつまでも燒いてゐたくおもふのだが、燃え方が早くて盡き易いのは殘念だが仕方がない、あの奴が臭を遺すのは千年どころか無窮につづくので、これは昔から聞いたことがない位だ。あの奴の得意な時には翟義の樣な忠臣をも逆臣だとして虐殺し京觀（記念標）まで建てたが、そんなことでどうして無理に忠臣を誣いることができるものか、彼が破滅となつた今では、嘗て彼に親族を殺された人人はみな喪服を着けて、張彥澤を刑に處した高勳（暗に李伯淵をさした）のしたやり方に從ふのはあたり

まへだ。さびしい獨りぼつちのわたしは秋風につれて一掬（ひとすくひ）の涙をそそぎながら、蒼梧（天子の葬られたまうた場所）とおぼしき方の日暮れの雲をながめつつ、聲の斷えんかぎりの叫びをつづけるのだ。